

1908 年ロンドン五輪 400 メートル走走路妨害事件の歴史的意義

A historical meaning of the obstruction in 400 meter race in the Olympic Games of 1908

1K10C289-0 鳥塚 絢
主査 石井昌幸 先生 副査 寒川恒夫 先生

【はじめに】

1908 年のロンドン五輪男子 400 メートル走決勝で、アメリカのカーペンターがイギリスのハルスウェルの走路を妨害したとして失格となった「走路妨害事件」が起きた。この事件は、陸上競技における単なる判定問題には留まらず、英米両国のメディアを騒がす大論争を引き起こした。

なぜこの事件を巡って、両国で様々な論争が起きたのか。本研究では、この走路妨害事件の歴史的意義を考察していく。

【第 1 章】

19 世紀後半から 20 世紀前半にかけてのイギリスは、1873 年以降に「大不況」を迎えた。その要因の一つに、アメリカやドイツのような後発資本主義国の急速な工業化による台頭がある。「世界の工場」から三大工業国の一つに転落した産業だけでなく軍事面にも変化が見られ、伝統的な外交政策である「栄光ある孤立」を放棄し、新たに軍事・外交面で同盟国をもとめる政策転換に踏み切った時期だった。

このイギリスの「転落」はスポーツにも顕在化した。スポーツを「教える側」だったイギリスが、19 世紀後半から自らが教えた当の相手に勝てなくなってきた。造船技術（＝海軍力）を象徴するヨットレース、軍馬の育成（＝陸軍力）を象徴するポロで、この傾向は顕著に見られ、イギリス社会を映し出している。

【第 2 章】

1896 年にフランス人ピエール・ド・クーベルタン男爵によって近代五輪が創始されてから、1908 年ロンドン五輪まで 3 回のオリンピックが開かれた。

ロンドン五輪では、イギリスとアメリカの衝突が問題となった。綱引きでアメリカは、リヴァプールの警察チームが鉄で補強した重いブーツを履いていたと抗議したが、イギリスの役員たちに即座に却下された。

男子 400 メートル走の決勝を迎えるまで、イギリスは陸上競技での優勝がなく、400 メートル走が最後のチャンスだった。準決勝では、ハルスウェルは当時のオリンピック記録で勝ち上がり、イギリスの期待を一身に背負った。

決勝は、ハルスウェルの他、アメリカ人 3 選手で行われた。試合は最終の直線でハルスウェルがカーペンターを抜かそうとした時、イギリスの役員たちが「No race」と宣言した。カーペンターは走路を妨害したとして失格、後日失格者を除いて再レースすることが決定された。アメリカは不服として再レースを拒否したため、ハルスウェル一人で決勝戦を行った。

ハルスウェルは、この事件を機に引退した。アメリカは全米体育協会会長のサリバンを中心にロンドン五輪後も抗議を続け、一方イギリスも調査に乗り出し、それに対抗した。

現在でも、この事件はホームタウン・ディシジョンの例として用いられる。しかし、1908 年のイギリスでは、スポーツにおいてフェアであることが重要視されていることなどから、過度にイギリスを意識したアメリカの思い過ごしとも考えられる。

【第 3 章】

「スポーツの先進国」であるイギリスのオリンピックにおけるメダル獲得率を数量的に調べると、1908 年を最後にその地位を維持できなくなっていることが分かる。走路妨害事件を歴史的文脈に位置付けると、これは単なる陸上競技だけの問題ではなく、オリンピックがすでに 1908 年には個人の勝ち負けを超えた国家間の争いになっていることが分かる。アメリカはイギリスを糾弾することで国の威信を示し、イギリスにとってはイギリスのスポーツ衰退論の象徴であると考えられる。経済や軍事面だけでなくスポーツにおいてもかつての指導的立場を失いつつあったイギリスが、自国のオリンピックで威厳を示したい気持ちの表れだったと推察できよう。

【おわりに】

走路妨害事件が、陸上競技における単なる判定問題を超えて英米両国のメディアを騒がす大論争となった背景には、経済的にも軍事的にもイギリスのヘゲモニー国家としての権威の動揺がスポーツの場面でも露見したことにあった。また、オリンピックに限って言えば、アメリカとイギリスにとってはすでに国の威信をかけた戦いになっていたと考えられる。走路妨害事件は、イギリススポーツの凋落を表していると言えよう。